

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：17601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02734

研究課題名(和文)現代日本語と韓国語におけるコピュラ文の対照研究

研究課題名(英文)A Contrastive Study of Copular Sentences in Japanese and Korean

研究代表者

金 智賢 (Kim, Jihyun)

宮崎大学・多言語多文化教育研究センター・准教授

研究者番号：40612388

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、現代日本語と韓国語のコピュラ及びコピュラ文の特徴を意味論と語用論的な観点から対照分析した。具体的には、韓国語のコピュラ文を日本語や英語の意味論的な枠組みに従って分類し、日本語と区別される助詞の特徴を明らかにした。また、一項名詞文、ウナギ文、動作性名詞述語文、拡張型コピュラ文、分裂文など、コピュラと関わる文型を対照的に取り上げ、両言語の特徴をそれぞれ記述した。さらに、コピュラ構造をベースとする韓国語の名詞句を取り上げ、多様な属格助詞の使い分けが文構造によることを突き止め、日本語との違いを新しい枠組みで説明した。以上の個々のテーマにおける研究成果は学会発表や出版等により発表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の学術的意義は、近年英語や日本語を対象に行われてきたコピュラ文分析の枠組みを韓国語に適用することでコピュラ文の対照分析や類型論的分析の可能性を広げたことにある。さらに、日韓両言語のコピュラ文の意味構造における対照分析は、主要助詞の類似点と相違点を新しい観点から捉えられる可能性を示唆するものとなっている。以上を踏まえ、本研究では日韓両言語の多様なコピュラ構造の語用論的分析も行っているが、これはコピュラやコピュラ文のみならず、日韓言語構造の本質にかかわる特徴を示すものとなっている。なお、韓国語の連体形の使い分けを明らかにした研究は、今後の韓国語研究にも重要な示唆を与えるものとする。

研究成果の概要(英文)：This study is a contrastive analysis of the characteristics of copulas and copular sentences in modern Japanese and Korean from semantic and pragmatic perspectives. Korean copula sentences were categorized according to the semantic framework of Japanese and English, and the characteristics of particles were clarified to distinguish the differences from Japanese. In addition, sentence types related to copulas, such as unary noun sentences, Unagi sentences, predicate verbal-nominal sentences, extended copula sentences, and cleft sentences, were analyzed. Furthermore, Korean noun phrases based on copula structure were adopted, and the fact that the usage of various genitive particles depends on the sentence structure was ascertained. The differences in the usage of particles between Korean and Japanese were demonstrated, and they can be explained using the newly identified framework. The results of this study on each of the above themes have been published and presented at conferences.

研究分野：言語学

キーワード：コピュラ 名詞文 日韓対照 語用論 意味論

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語においてコピュラ文の研究といえば、陳述の一部として扱われてきた「N1 は N2 だ」形の文における N1 と N2 の意味関係を解明し、それによって名詞文を分類しようとする研究を指すことが多い。韓国語においては、従来「ida」そのものの意味特質や文法的位置を特定しようとする研究が主流だったが、近年は「ida」文の構文的特徴の解明や分類を行おうとする研究も活発になってきている。

(2) 本研究で言うコピュラ文とは、文の述語にコピュラの「だ」や「ida」(だ)を含むか、ないかは意味的にそれらを内在している全ての文を指し、「N1 は N2 だ」形の文に限らず、コピュラを有する多様な文を観察対象とする。コピュラ文はその言語の最も基本的な文型で、「自然言語の意味上の重要な特徴がコピュラ文に凝縮されている」(西山 2003)と言える。本研究は、日韓のコピュラ文を対照分析することで、両言語の本質的特徴を明らかにすることを旨とするものであり、このような研究は管見の限りこれまで行われていなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、日本語と韓国語のコピュラ文の用法を分析し、コピュラ「だ」と「ida」の意味・機能における類似性や相違性を対照的に記述することで、コピュラの通言語的な特徴を明らかにすることを目的とする。

(2) 文末にコピュラが来る基本的なコピュラ文をはじめ、多様な形のコピュラ文、及び、コピュラのない名詞止め文等を取り上げ韓国語と対照分析することで、日韓両言語のコピュラ文の意味論的、語用論的特徴を包括的に把握することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、日韓のコピュラ文における包括的な対照研究という研究目的を達成するため、順次、基本的なコピュラ文、一項名詞文や拡張的なコピュラ文、コピュラ文の周辺現象に関わる各テーマを取り上げた個別研究を段階的に重ね、最終年度に研究成果全体をまとめ書籍化する。

(2) 言語データは、日韓両言語の大規模コーパスと自然会話データを用いる。研究分担者及び研究協力者と定期的に打ち合わせ・議論を行い、研究の完成度を高める。各段階の研究成果は、日本や韓国、その他の国における学会で発表及びインターネットホームページにて公開、出版することで、社会に発信する。

4. 研究成果

(1) 本研究では、現代日本語と韓国語のコピュラ及びコピュラ文の特徴を意味論と語用論的な観点から対照分析し、韓国語コピュラ文の意味論的分類、一項名詞文、ウナギ文、動作性名詞述語文、拡張型コピュラ文、分裂文、コピュラ構造をベースとする韓国語の名詞句等を順に取り上げた。以上の各テーマにおける研究成果は金智賢(2021)に章ごとにまとめているので、ここでは各章の概要を示す。

(2) 第1章では、コピュラとコピュラ文の再定義から入り、英語や日本語の先行研究で共通して議論されている4種の基本的なコピュラ文について韓国語の例をもって確認した。特に、西山(2003)の枠組みによって日韓両言語を対照分析することで、日本語と同じ枠組みで韓国語を分析できただけでなく、両言語では助詞の現れ方に有意義な違いがあることを、従来の対照分析とは異なる観点より明らかにした。第2節では、韓国語コピュラ文の観察対象を基本型、特殊型、拡張型に分けたが、本章の議論は、その核心となる基本型コピュラ文の意味論的なアプローチだった。

(3) 第2章では、一項名詞文を通して「だ」と「ita」の述語としての意味機能と非述語としての意味機能を観察し、それぞれの具体的な説明を試みた。「だ」と「ita」はどちらも述語としての働きがある一方、「だ」は非述語としての用法が目立った。述語としての意味機能とは、「Xだ」や「X-ita」が「～は～だ」という先行事態の「～だ」を構成するもので、非述語としての意味機能には話し手の心的態度を表す「だ」の終助詞的な働きがあった。非述語の「だ」はまだ解明されていないところが多い。「ita」の非述語としての用法は限られた、特殊なものであると言える。本章では、特にこれらの形式がコピュラという概念とどうつながるかという観点から考察を行ったが、発話のレベルの違いはあるものの、どちらも概念同士を結び付けるといったコピュラの意味機能に基づいた形式であることを主張した。

(4) 第3章では、日韓のウナギ文を文型や前提の種類でいくつかに分け、それぞれの特徴を細

かく記述するとともに、ウナギ文に用いられる「だ」及び「ita」の述語としての性質や「は」「un/nun」のコピュラ的な働きにも注目しながら考察を行った。ウナギ文は、「AはB」「A-nun B」型と「AはBだ」「A-nun B-ita」型に分けられ、前者は情況的前提が存在する場面と命題的前提が存在する場面の両方に用いられる一方で、後者は日本語と韓国語で異なることを確認した。「AはBだ」は情況的前提のあるときや命題的前提のあるときに用いられるが、「A-nun B-ita」は命題的前提のある場面ではか用いられなかった。なお、命題的前提がある場面におけるウナギ文は「Aは(Rは)Bだ」「A-nun R-nun B-ita」のような意味構造をしていることを論じた。さらに、「AはB」「A-nun B」型のウナギ文は、助詞「は」と「un/nun」がコピュラ的な機能をしていることを述べた。

(5) 第4章では、日韓の「VNだ」「VN-ita」型、「A-nun VN-ita」「AはVNだ」型、及び、「AがVNだ」型の動作性名詞述語文を対照的に分析した。「VNだ」「VN-ita」型と「A-nun VN-ita」「AはVNだ」型は、両言語に存在するもので、前者は 状況展開提示 用法として、後者は 択一提示 用法として用いられやすいことを観察した。ところが、どちらのタイプにも、日本語には韓国語に存在しない用法のものがあることを確認した。両言語の共通する動作性名詞述語文の 状況展開提示 と 択一提示 用法は、話し手が発話時以前に構築している動作のリストと言える 事象スキーマ が存在し、そのリストのうちのどれかの動作を「VN」として表現するものだった。一方、日本語だけに存在する「VNだ」及び「AはVNだ」文では、「VN」は 確定事象として表現されるが、事象スキーマ に基づくものではないとした。同じく 事象スキーマ によらない日本語特有の「AがVNだ」文は、 報告 用法を有することを述べた。

(6) 第5章では、日韓の「象は鼻が長い」構文やカキ料理構文など、拡張型コピュラ文とその関連構文を観察した。「AはBが」(「象は鼻がかわいい」)文と「AはBがCだ」(「このタワーは高さ10mだ」)文は、「B」が部分語と側面語で省略の可能性に違いはあるものの、どちらも「A」の属性を述べる措定文で、韓国語にも「A-nun B-ka」と「A-nun B-ka C-ita」の構文が存在する。これらの両構文は、日本語では、それぞれ「Aは Bだ」(「象は、かわいい鼻だ」)と「AはCのBだ」(「このタワーは10mの高さだ」)に言い換えることができ、よく使われる形の文であるが、前者は、韓国語では珍しいものであることを明らかにした。後者の「このタワーは10mの高さだ」タイプの文も、「象は、かわいい鼻だ」よりは用いられるものの、日本語ほど幅広い使い方というわけではないことを見た。もう一つの「AはBがCだ」「A-nun B-ka C-ita」(「カキ料理は広島が本場だ」)文については、韓国語に「A-nun C-ka B-ita」に言い換えた文が用いられやすいことを観察した。

(7) 第6章では、日韓の分裂文を取り上げ、その構文的な共通点と相違点をまとめた。両言語の分裂文は「～のは～だ」・「～ kes-un ~ita」という形式を中核とするが、形式的には述部に現れる要素における違いをはじめ、「の」と「kes」、「だ」と「ita」の間にそれぞれ違いがあり、本格的な分裂文を形成するのは、述部に多用な要素が現れ、「の」が純粋な補文標識として働く日本語の方であることを論じた。「だ」と「ita」は、前章まで観察したのと同じような結果が得られ、「だ」より顕著な「ita」の述語性を確認することができたと思われる。「だ」の述語性の低さ故に、日本語の「～のは～だ」型の分裂文は豊かになれるものと考えられ、「だ」の現れない「～のは～」型の分裂文が可能なのは日本語の基本型コピュラ文の特徴と連動していると述べた。

(8) 第7章では、「AはBだ」の意味構造を有する「BのA」構造における「の」に韓国語の「in」、「uy」、「」がどのように対応し、どんな基準で使い分けられているかについては、踏み込んだ議論を行った。コピュラ文をベースとする名詞句の分析からはじめ、上記の韓国語名詞句の連体形式が、名詞句の意味論及び語用論的な要因で使い分けられていることを明らかにした。

(9) 第8章は結論であるが、ここでは残された課題として、1)言語形式とコピュラの問題、2)「だ」と「ita」の述語性の問題、3)コピュラ文の意味論の問題を取り上げ、各章の内容を踏まえながら論じた後、その他の課題を述べた。

<引用文献>

西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論 指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房

金智賢(2021)『コピュラとコピュラ文の日韓対照研究』ひつじ書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金智賢	4. 巻 255
2. 論文標題 「AはBだ」から「BのA」へ いわゆる属格助詞の日韓対照を兼ねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 (47)-(88)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kim, Jihyun	4. 巻 92
2. 論文標題 Semantics of Noun Phrases and Copular Sentences in Korean: contrastive analysys with Japanese	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國語學	6. 最初と最後の頁 91-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15811/jkl.2019..92.004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金智賢	4. 巻 255
2. 論文標題 「AはBだ」から「BのA」へ いわゆる属格助詞の日韓対照を兼ねて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 朝鮮学報	6. 最初と最後の頁 (47)-(88)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 動作性名詞述語文の日韓対照研究
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 「AはBだ」から「BのA」へ いわゆる属格助詞の日韓対照を兼ねて
3. 学会等名 第263回朝鮮語研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 韓国語と日本語のコピュラとコピュラ文に関する対照研究 日本語との対照分析を兼ねて
3. 学会等名 第7回駒場日韓対照研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 「述語前置型分裂文」の日韓対照分析
3. 学会等名 第8回駒場日韓対照研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 二項名詞文の日韓対照
3. 学会等名 社会言語科学会第42回大会・ワークショップ
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 分裂文から見る日韓のコピュラの特徴
3. 学会等名 日本言語学会第157回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 韓国語と日本語のコピュラとコピュラ文に関する対照研究（原題韓国語）
3. 学会等名 第45回國語学会全国学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 日本語と韓国語の分裂文の特徴
3. 学会等名 韓国日本語學會第39回春季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jihyun Kim, Eugene Min
2. 発表標題 On Korean copula -ida: A Comparative study with Japanese -da
3. 学会等名 The 20th Meeting of the International Circle of Korean Linguistics（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 二項名詞文における「ida」の意味機能について 日本語の「だ」との対照分析から
3. 学会等名 第68回朝鮮学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金智賢
2. 発表標題 一項名詞文から見る「ida」と「だ」の意味機能
3. 学会等名 第256回朝鮮語研究会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金 智賢	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 コピュラとコピュラ文の日韓対照研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	小熊 猛 (Koguma Takeshi) (60311015)	金沢大学・国際基幹教育院・教授 (13301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------